

第6章 高齢者学習支援に関する日韓比較研究

第1節 調査の目的と対象、調査方法

大阪教育大学生涯教育計画論研究室では、これまで2013年と2017年の2度にわたり、大阪府高齢者大学校の受講者調査を実施してきたが、そこで得られた知見は大阪府高齢者大学校あるいは日本の高齢者大学固有のものだろうか？ 高齢者大学受講者の実態と意識を国際的に比較検討することを目的として、韓国ソウル特別市の東南部に位置する、城南市の盆唐区シニア福祉センターの高齢者大学で同様の調査を実施した。この地区は、韓国でも比較的生活水準の高い層が多く住む地域である。大阪府高齢者大学校の受講で年52,000円の受講料がかかる点、および高大が大阪市内のほぼ中央部に位置することなどの理由をふまえ、この地域が選出された。

城南市は人口100万人ほどの都市で、ソウル市の衛星都市という側面をもつ。市内に3つの区があり、この福祉センターへは、60歳以上の市民ならだれでも利用できる。2017年度には全部で112の講座が開講されており、(原則として)一度に4講座まで同時に受講できることになっている。高齢者大学の設立は2007年で、キリスト教系財団が運営し、市が財政的補助を行っている。受講料は教材費でいどであり、一度会員登録をすると以降継続的に利用できる。職員数は計52名である。

韓国調査にさいしては、まず大阪府高齢者大学校で行われた、2013年調査(大阪教育大学生涯教育計画論研究室編『高齢者大学受講者への学習支援に関する調査研究』2014参照)での設問と2017年調査(本報告書第5章まで)での設問を総合したうえで、それらの比較的基本的な部分をつなぎ合わせて質問紙を完成した(資料6参照)。そこでは、受講の目的、継続受講の理由、受講後の評価、学習ニーズ、学習・社会活動への関心、学習意識の変化、希望する学習方法、学習の場、基本的属性などを設問にした。そうしてできた質問紙案をもとに、2016年11月19日・20日に北海学園大学で開かれた、日本社会教育学会と韓国平生教育学会の合同セミナーにて、慶熙大学の崔一先氏とソウル大学大学院の朴志淑氏とで協議を行い、おおむねの方向性を確認した。その後韓国側からの検討事項をふまえて修正を施したのちに、朴志淑氏に韓国語への翻訳およびその日本語訳をお願いした。

調査は、崔一先氏の協力を受けつつ、2017年4月17日から19日にかけて、城陽市盆唐区シニア福祉センターの利用者に質問紙が配布された。質問紙配布にさいしてはお礼の品を提供し、回答漏れがないかを職員がチェックした。質問紙配布数は600通、有効回収率数は549通で、有効回収率は91.5%であった。その後質問紙全部を大阪教育大学に郵送していただき、2017年6月から8月にかけてデータ入力、集計、集計表作成、主な分析を行った。

次節以降ではこの韓国調査の結果を、必要に応じて大阪調査の結果との対比のもとにみていくが、ここでは原則として盆唐区シニア福祉センター調査を「韓国調査」と呼び、2つの大阪府高齢者大学校調査を「大阪調査」と呼ぶことにする。また調査結果の日韓比較にさいしては、原則として韓国での調査で用いられた質問紙(日本語訳)を軸に分析を進めていく。両調査の質問項目は必ずしも完全に一致していないこともお断りしておく。

第2節 回答者の基本的属性

図表6-1は韓国調査回答者の基本的属性(性別、年齢、学歴、過去の職業)を、大阪データとの対比のもとに示したものである。これによると性別では、男性45%、女性55%とほぼ男女半々であり、大阪データとほぼ変わらない。しかし年齢では平均年齢が73.6歳(大阪68.5歳)でかなり年齢層が高い。60代前半以下は6%、同後半が19%、70代前半33%、同後半以降42%と、じつに回答者全体の4割以上が75歳以上であった。これはこのセンターが地域住民に対して廉価で学習の場を提供していること、および福祉センターでの学習であることが関連していると考えられる。大阪データとの比較では、とくに平均年齢で5歳ほどの開きがある点をふまえておく必要があるだろう。

図表6-1 調査回答者の基本的属性(韓国調査)

	全体 比率(回答数)	男性 比率	女性 比率	大阪調査 比率
性別				
男性	45.4(249)			49.4
女性	54.6(299)			50.6
全体	548			803
年齢			**	**
64歳以下	5.8(32)	3.6	7.7	12.5
65~69歳	19.3(108)	15.7	22.4	44.7
70~74歳	32.6(179)	32.1	33.1	27.8
75~79歳	28.1(154)	28.9	27.4	11.6
80歳以上	14.2(78)	19.7	9.4	3.3
全体	549	249	299	787
平均年齢: 73.57歳(男性74.73歳、女性72.57歳)				平均年齢 68.49歳
(最終)学歴			**	**
小・中学校	5.8(32)	3.6	7.7	1.1
高等学校	27.9(153)	18.5	35.6	36.0
短大	9.3(51)	6.0	12.1	14.9
大学・大学院	56.9(312)	71.9	44.6	48.0
全体	548	249	298	784
以前の職業(最長職)			**	**
無職(主婦を含む)	33.0(181)	4.0	57.4	12.0
自営業・農業など	11.5(63)	14.5	9.1	7.7
専門職(医師、技師など)	7.8(43)	11.2	5.0	7.0
管理職(官公庁・民間)	12.2(67)	24.9	1.7	24.8
事務職(官公庁・民間)	13.1(72)	21.7	5.7	20.6
教育・研究職	13.5(74)	11.6	15.1	10.9
技能職	1.8(10)	3.2	0.7	6.9
販売・サービス職	2.9(16)	4.4	1.7	4.7
パート、アルバイトなど	0.4(2)	0.0	0.7	2.8
その他	3.6(20)	4.4	3.0	2.5
全体	548	249	298	809

注) 右端の検定は韓国調査と大阪調査(2017)の比較より。

男女別に年齢をみると、平均年齢が男性74.7歳、女性72.6歳で、とくに80歳以上が男性20%、女性9%であった。明らかに男性のほうの年齢が上だという点には留意がいるだろう。当該センターでは、地域に根ざした健康づくりや軽スポーツなどの福祉系の科目が多いため、80代でも利用しやすいのであろう。

最終学歴では、大学卒が57%と大阪府高齢者大学校よりも高率であった。その分短大卒の比率が9%であり、このあたりに日本との差があるといえる。男女別では、男性の72%が大学卒で、女性の45%と比べるとかなり差が大きい。日韓ともに男性のほうが高学歴であったのは、以前の時代の傾向の反映だといえよう。

以前の職業（最長職）では、無職が33%と最も高率であったが、これは男性4%、女性57%と、女性に専業主婦の者が多かったことの反映だと思われる。女性無職率は大阪データよりも高い。逆に大阪データで高率（25%）であった管理職は12%で、教育職14%、事務職13%のほうが高率であった。男女別では男性に元管理職が多く、女性に元教育職が多かった。

図表6-2は、家族形態と健康状態をみたものであるが、家族構成では「ひとり住まい」や「夫婦2人暮らし」では、大阪と大きな差はないようである。「その他」の部分は、自分の親やきょうだいとの同居などがあるがこの点は韓国では低率であった。韓国データで留意がいるのが「ひとり住まい」の者で、日本同様、この比率は男性9%、女性30%で、圧倒的に女性が高率であった。また年齢の高い者ほど「ひとり住まい」が高率であった。

図表6-2の下段は健康状態をみているが、「非常に健康」が14%、「やや健康」が65%で、「健康」だと感じている者は79%となるが、大阪データの88%にくらべるとかなり低い。これは平均年齢が高いことと福祉施設だということ、健康系のプログラムが多いことなどと関連があると思われる。なお図表は載せなかったが、長期療養者保険等級の設問では、96%が「申請したことがない」「健康」という回答であった。

また大阪データとの比較はないが、巻末資料を参照すると、受講講座数は2講座が40%、3講座が26%で、1講座のみ受講している者は22%に留まっていた（大阪では1講座のみしか受講できない

図表6-2 家族形態と健康状態

現在の家族構成	韓国	大阪	
ひとり住まい	20.1	17.3	**
妻または夫と2人暮らし	57.7	57.7	
子ども（夫婦）との二世帯暮らし	15.7	12.9	
子ども、孫などとの三世帯暮らし	6.2	2.8	
その他	0.4	9.3	
全体	548	797	
健康状態			
非常に健康	13.8	19.8	**
どちらかといえば健康	65.4	67.9	
どちらかといえば健康ではない	18.6	8.8	
あまり健康ではない	2.2	3.6	
全体	549	800	

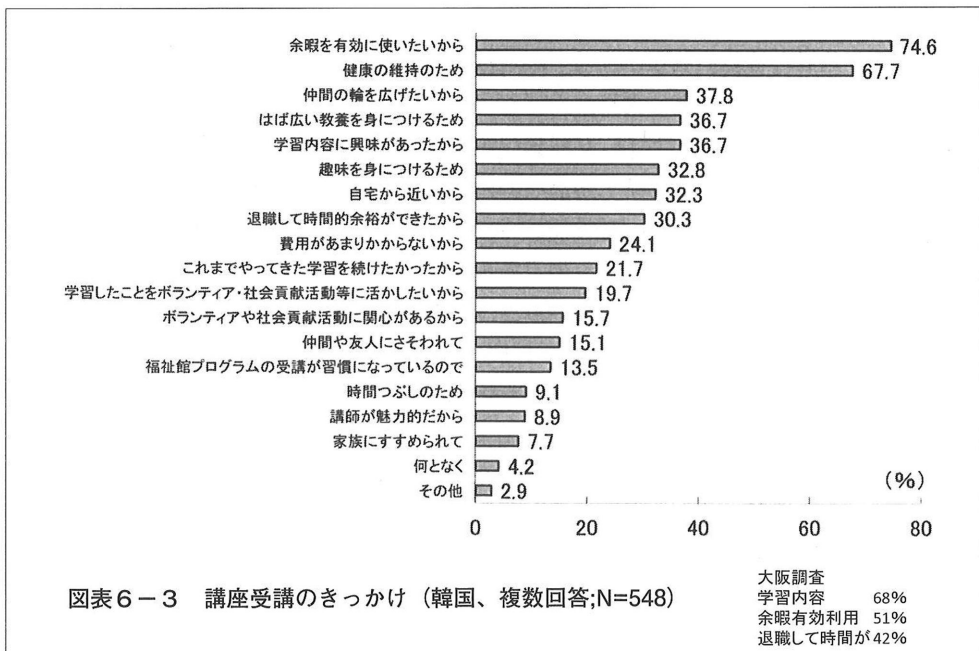
い)。多くの講座のかけもちが認められている制度の特徴が出ているといえる。

このセンター（福祉館）までの主な交通手段（巻末資料）では、徒歩のみが32%と最も多く、車の24%と地下鉄の23%、バスの17%がこれに次いでいた。地域に密着したセンターであるがゆえの特色だといえる。大阪データで所要時間30分未満が11%に留まっている点を考えると、受講者の居住地域の範囲に大きな差があるといえるだろう。

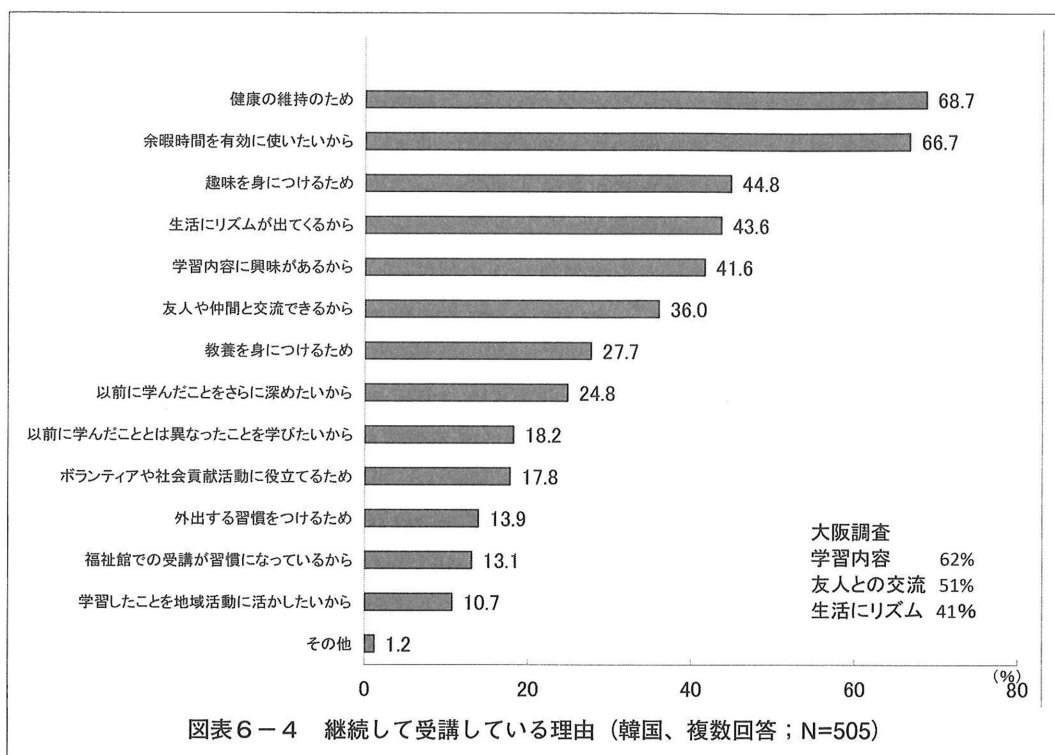
第3節 受講の目的と評価

図表6-3は、受講のきっかけを示したものであるが、大阪データ（図の右下部参照）と結果がかなり異なっているといえる。最も高率であった項目は「余暇を有効に使いたいから」（75%、大阪51%）で、これと「健康の維持のため」（68%、大阪29%）の2項目がとくに多く選択されていた。大阪データで最も高率であった「学習内容に興味があったから」（韓国37%、大阪68%）はそれほど選択されていない。地域に根ざした福祉施設の特徴が出ているといえる。「仲間」「教養」「学習内容」は30%台後半の比率であったが、「趣味」（韓国33%、大阪16%）、「自宅に近い」（韓国32%、大阪14%）、「費用があまりかからない」（韓国24%、大阪13%）、「ボランティアなどに活かす」（韓国20%、大阪8%）、「学習の継続」（韓国22%、大阪6%）などは、廉価で受講継続が可能な地域施設の特徴が出ているといえる。大阪府高大の場合は民間立でかつ学習中心、1年のみ受講で地域制限なしであり、そうしたちがいが随所に出ているといえる。

巻末資料から受講年数に注目すると、5年以上の継続受講者は57%（大阪17%）で、逆に1年目の受講者は8%（大阪30%）と、過半数の受講者が5年以上の継続受講者であった。この点は施設そのものの特性の反映だといえる。



図表6-3 講座受講のきっかけ（韓国、複数回答;N=548）

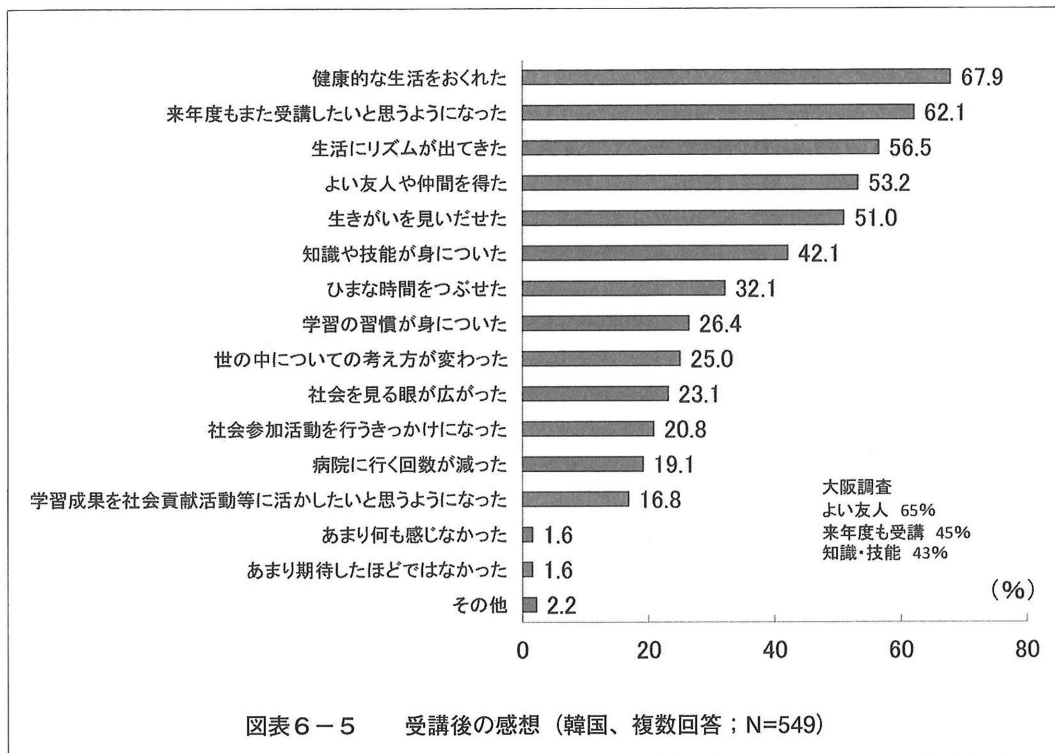


図表 6-4 では継続受講の理由をみたが、前設問と同様、「健康の維持のため」(69%、大阪 29%)、「余暇の有効利用」(67%、大阪40%) の 2 項目がとくに高率であった。「趣味」(45%、大阪14%)、「生活にリズム」(44%、大阪41%)、「学習内容」(42%、大阪62%) も高率であったが、学習内容だけは大阪センターのほうがかなり高率であった。「教養」(韓国28%、大阪35%) も同様であった。やはり施設の機能の特色が反映された数値だといえよう。なお「健康維持」は、男女別で女性が76% (男性60%) と非常に高率であった。

「最も大事な受講目的」(巻末資料) も同様に、韓国データでは「健康な生活」が46% (大阪 12%) と最も多く、これと「余暇有効利用」(36%、大阪17%) の 2 つが主な受講目的だといえる。「健康な生活」は女性の回答率が57% (男性34%) であった。

図表 6-5 は「受講後の感想」をみたものであるが、これによると、やはり「健康的な生活をおくれた」(68%、大阪20%) が最も高率であった。「来年度も受講したい」も62% (大阪45%) だったが、これは地域に根ざした施設特性の反映だともいえる。「生活にリズム」(57%)、「友人・仲間」(53%)、「生きがい」(51%) も高率であった。大阪データと比較して最も顕著な差がうかがえたのが「病院に行く回数が減った」で、韓国19%に対し大阪データではわずかに 1% であった。韓国データのこの項目を年齢別にみると、60代 9%、70代前半18%、同後半以上25%と、年齢が上がるにつれて比率が顕著に高くなっていった。高齢者の健康・医療と結びついた施設だともいえる。

巻末資料から「学習成果の活用」に注目すると、「福祉館で学んだことをボランティアや社会貢献活動等に活かしたい」者は48%と非常に高かった。「人生経験で学んだことを活かしたい」も 40%と非常に高く、この点は大阪データとはやや異なっていた。



図表6-5 受講後の感想（韓国、複数回答；N=549）

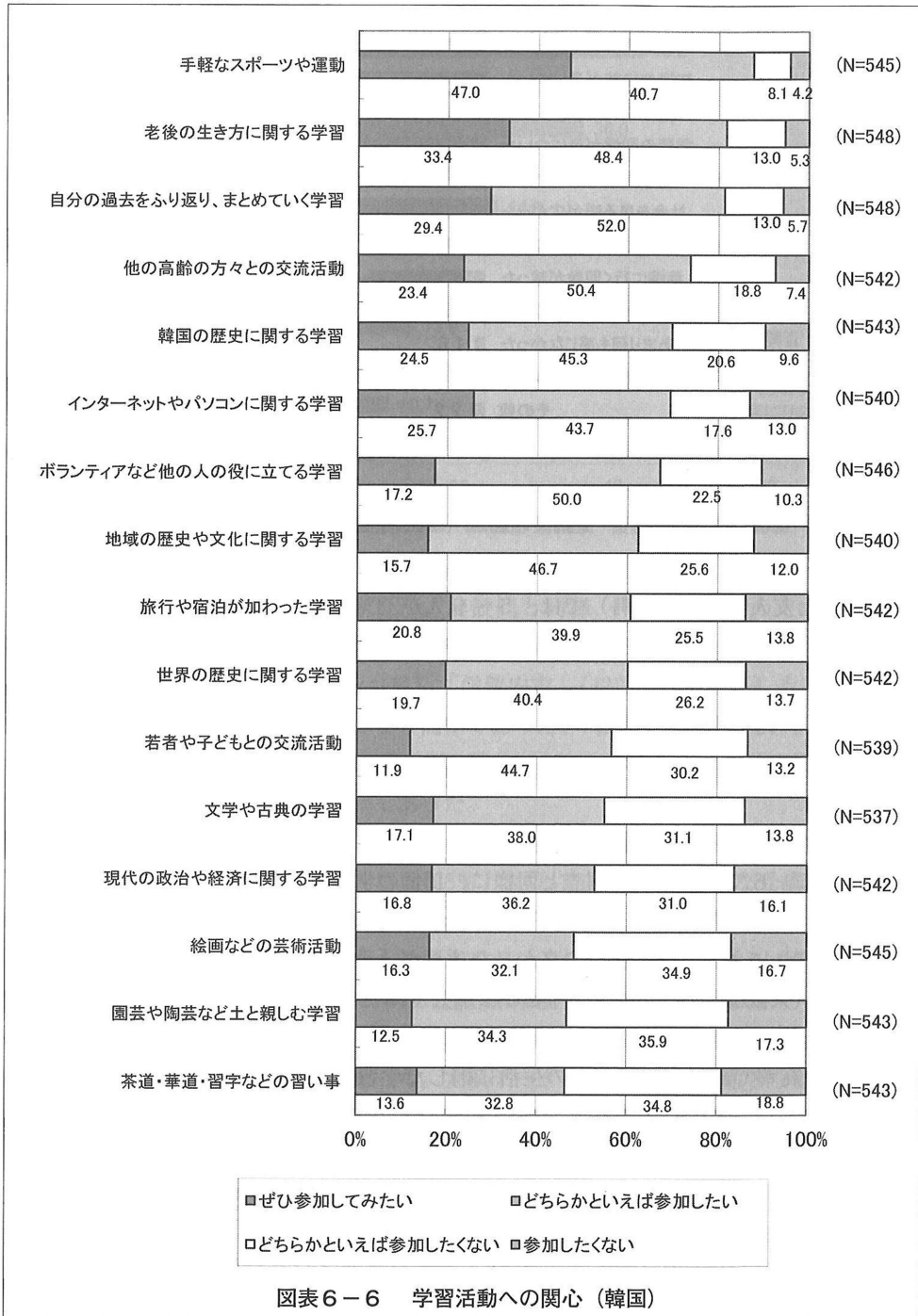
福祉館でできた友人数（巻末資料）では、5～9人が33%、20人以上が20%と、ほぼまんべんなく分布しているようであった。男女別では女性のほうができた友人数がやや多かったようである。

第4節 学習・社会活動への関心

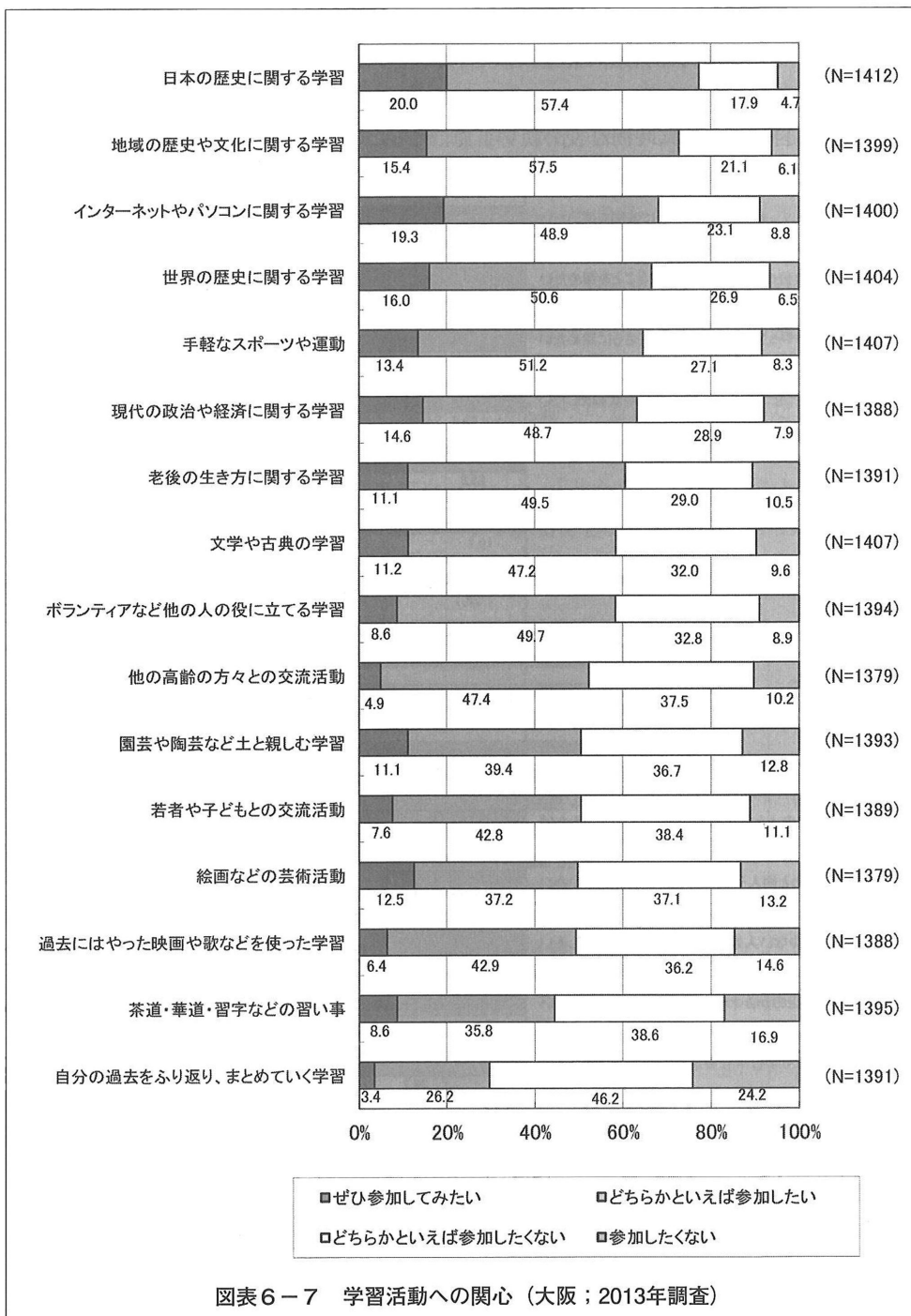
本節では4つの設問から学習や社会活動への関心をみていく。一般的な学習関心（の領域）を示したものが図表6-6である。大阪調査と同様に、16個の学習内容領域について4件法でたずねている。そのうち「ぜひ参加したい」「どちらかといえば参加したい」の合計比率が高いものから順に並べている。これによると最も関心の高かった項目が「手軽なスポーツや運動」で、学習ニーズがある者は88%（大阪65%）であった。「ぜひ参加してみたい」も47%と、半数近くの者が関心を示していた。「老後の生き方」（82%）、「自分の過去をふり返る」（81%）、「他の高齢者との交流」（74%）も非常に高率であった。高齢期の生活に則した学習の比率が高いといえる。逆に「茶道などの習い事」（44%）、「園芸や農園」（47%）、「絵画などの芸術活動」（48%）あたりはやや低率であった。習い事系の学習は低率であったが、そもそも茶道や華道などは、韓国の高齢者学習の場であまり行われていないため、学習ニーズが想起しにくかったといえる。参考までに2013年大阪調査での学習ニーズの単純集計の結果を、図表6-7として再掲しておく。これによると、大阪の場合は、教養系の学習ニーズの比率が高いといえる。

韓国データでは男女差はあまりうかがえなかったが、「ボランティアなど」（男性63%、女性

71%)と「習い事」(男性34%、女性57%)は女性のほうが高率であった。年齢別では、スポーツや習い事、ボランティア、若者との交流、インターネットなどで60代のほうにニーズが高かったが、「過去をふり返る」と「他の高齢者との交流」では60代から70代前半、70代後半以上にかけて比率が上昇していた。この2項目の傾向は大阪での調査結果とも符合するものであった。



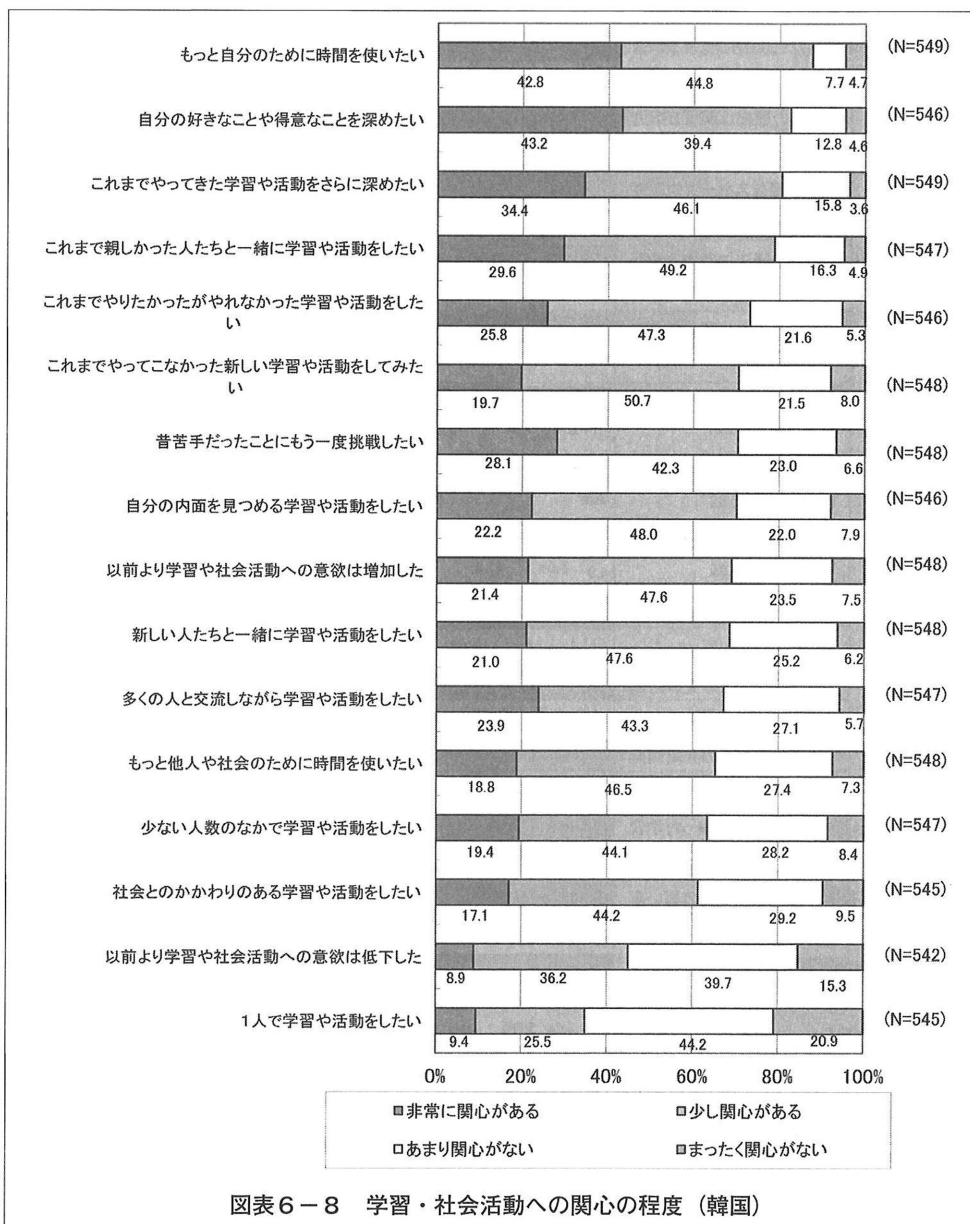
巻末資料および図表6-6と6-7より学習ニーズの日韓比較に注目するならば、2013年の大阪府高齢者大学校調査で高率（「ぜひ参加してみたい」+「どちらかといえば参加したい」）であったのは、「日本の歴史」（77%）、「地域の歴史や文化」（73%）、「インターネット・パソコン」（68%）などで、逆に低率だったのは「過去をふり返る」（30%）、「茶道などの習い事」（44%）あたりであっ



た。歴史やインターネット、手軽な運動、政治・経済問題などが人気で、ライフ・レビューと習い事系のニーズ率は低かった。

日韓比較においては、多くの項目で韓国の回答のほうがニーズは高かった。とくに「過去をふり返る」（韓国81%、大阪30%）、「手軽なスポーツなど」（韓国88%、大阪65%）あたりで顕著な差がうかがえた。逆に歴史と古典、園芸。陶芸、政治などは大阪のほうが高率であった。これらは、施設の目的のちがいや受講者の年齢層の差が反映されたものと読み取れた。

図表6-8は、学習・社会活動への関心の程度をたずねた結果で、これによると、最も高率であった項目は「もっと自分のために時間を使いたい」で、何らかのかたちで「そう思う」者は88%であった。

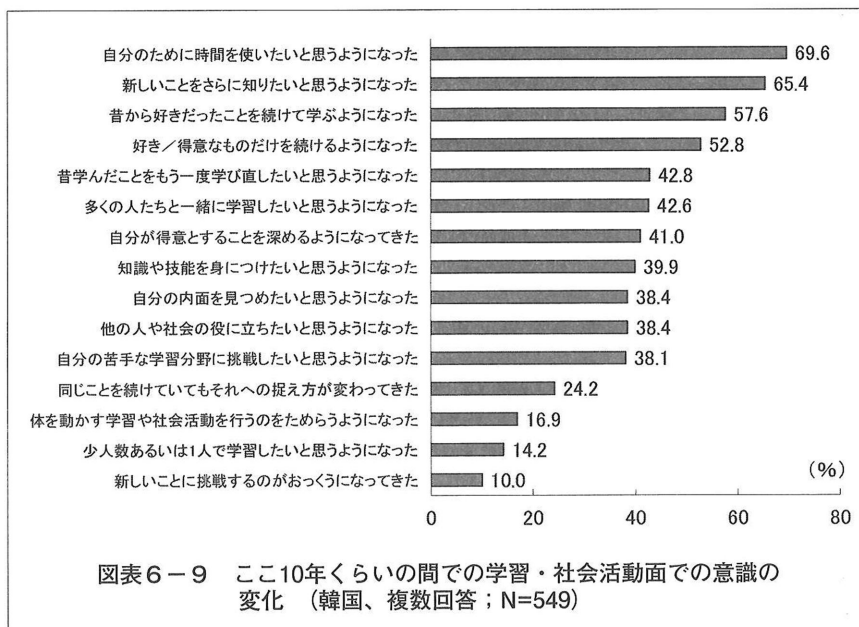


た。「自分の好きなことや得意なことを深めたい」(83%)、「これまでやってきた学習や社会活動をさらに深めたい」(81%)までの3項目が80%以上の選択率であり、自分の好きなことやこれまでうまくいった学習や活動を継続したいというニーズが高いといえる。逆に「1人での学習・活動」(35%)と「学習意欲が低下した」(45%)はかなり低率であった。

性別や年齢別では顕著な差はあまりうかがえなかったが、学習・社会活動への意欲に関してはやや女性のほうが肯定的であり、「多くの人との学習・活動」は年齢の高い層のほうが高率であった。後者に関しては地域に根ざした施設の特徴が反映されているといえる。

日韓比較(巻末資料)に関してはほとんどの項目で韓国の方に関心が高かったが、「これまでやってこなかった新しい学習や社会活動をしてみたい」(韓国70%、大阪80%)では有意に大阪のほうが高率であった。「これまでやりたかったがやれなかった学習・活動」「新しい人たちと一緒に」も同様に大阪のほうがやや高率であった。これらの相違は、大阪府高齢者大学校受講者のほうの平均年齢が若くかつ1年制の講座であるため、新しい学習や活動に関心を示す者が多かったことによると解釈される。自分のやりたいことを深める部分で韓国データの特徴がうかがえたが、新しいことに向かうという点では大阪データの特徴がうかがえたかといえる。

図表6-9は、ここ10年くらいの間での学習・社会活動への意識の変化をみたものである。これによると最も高率だったのは「自分のために時間を使いたい」(70%)で、「新しいことをさらに知りたいと思うようになった」(65%)がこれに次いでいた。「昔から好きだったことを続ける」(58%)と「好きなものや得意なものを続ける」(53%)までが50%をこえる項目であった。逆にネガティブなニュアンスのある項目の選択率は低かった。



男女別ではが
いして女性のほう
がポジティブな項
目の選択率が高
く、「同じことを
続けていてもとら
え方が変わった」
(男性17%、女性
30%)、「自分のた
めに時間を使いた
い」(男性64%、
女性75%)などで
は、女性のほうが
有意に高率であ
った。年齢別では
顕著な変化はう
かが

えなかったが、「自分の内面を見つめたいと思うようになった」は、60代36%、70代前半39%、同後半以上40%と、年齢上昇とともに徐々に選択率が高くなっていった。

2013年の大阪調査の結果と比較すると、すべての項目で韓国の方が選択率が高かったが、ネガ

ティヴな項目（「学習・活動をためらう」など）でも韓国の回答率が高かったため、大阪では選択された項目数そのものが少ないようであった。比較においては、大阪では「新しいことをさらに知りたい」（57%）が最も多く、「自分のために時間を」は51%であった。韓国では好きなことや活動継続への意識が高かったが、大阪ではこれらとともに新しいことへの挑戦の意識も混在していたといえそうである。

図表6-10は70代以降に学んでみたい学習内容（27領域からの選択）であるが、やはり「健康問題」（69%）、「運動・スポーツ」（59%）の2項目の選択率が高く、「音楽」（45%）、「趣味」「高齢者問題」（以上39%）がこれに続いていた。「社会の出来事」（6%）、「子ども・青少年問題」（7%）などは低率であった。男女別では、歴史や政治、哲学など学問系に男性の比率が高く、音楽やこころの問題、人との交流などの交流系

図表6-10 70代以降に学んでみたい学習内容（複数回答；韓国）

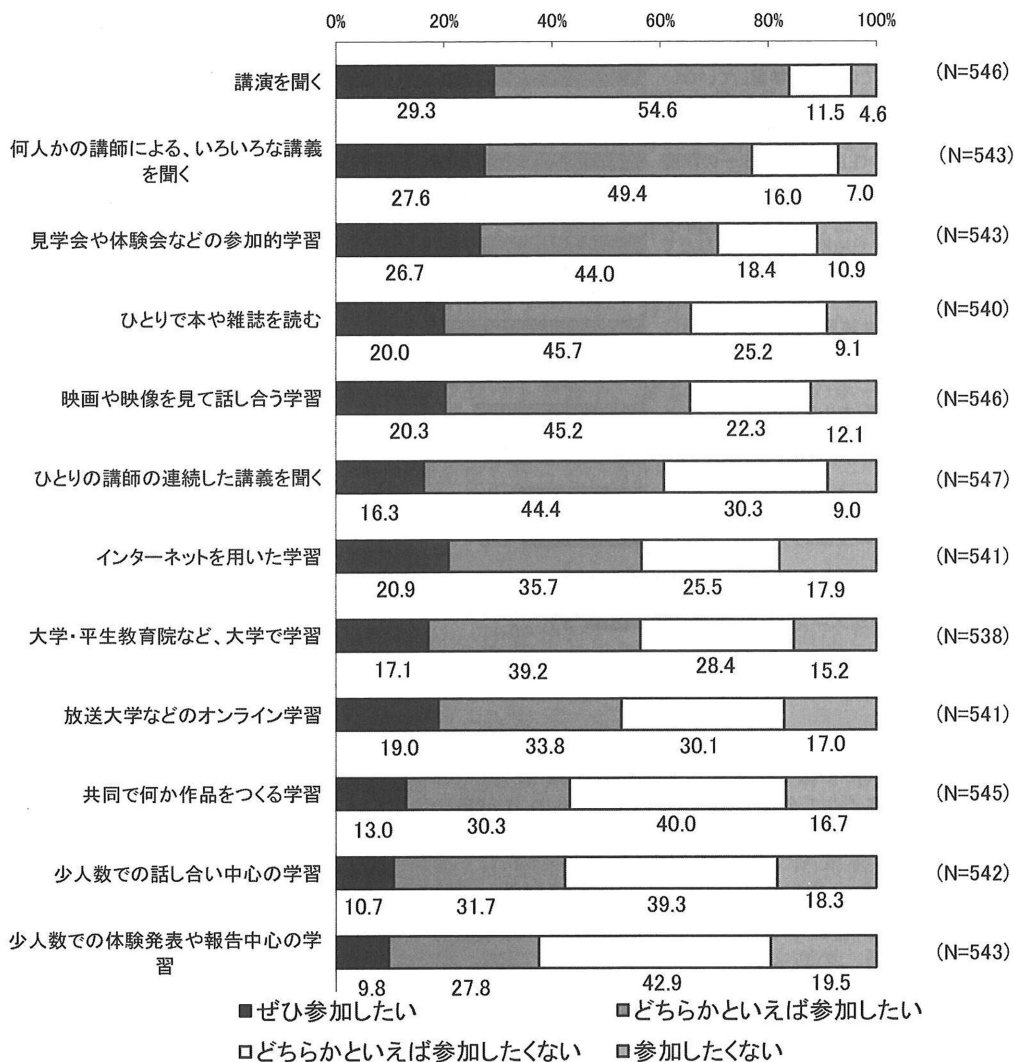
学習内容	比率(回答数)	学習内容	比率(回答数)
健康問題	69.0(378)	園芸・農園	20.1(110)
運動・スポーツ	58.8(322)	外国語	18.2(100)
音楽	45.1(247)	古典や文学	16.2(89)
趣味	39.1(214)	経済	14.4(79)
高齢者問題	38.9(213)	書道、習字	13.7(75)
医療	34.1(187)	哲学	13.0(71)
歴史	33.9(186)	法律	11.3(62)
家族問題	30.8(169)	美術	11.3(62)
終活、死に関すること	28.5(156)	国際問題	8.6(47)
宗教	26.1(143)	政治	7.1(39)
情報・インターネット	25.2(138)	自分史、過去のふり返り	6.8(37)
人との交流	23.9(131)	子ども・青少年問題	6.6(36)
こころの問題	21.2(116)	社会の出来事	6.4(35)
福祉	20.3(111)	全体	548

の領域で女性のほうが高率であった。年齢別では、高齢者問題、終活など、医療、宗教あたりで年齢の上の層の選択率が高かった。インターネットやスポーツなどはやや若い層の選択率が高かった。

先にみたように大阪データでは、「歴史」（46%）が最も人気で「健康問題」「趣味」などがこれに続いていた。これは、大阪府高齢者大学校が主に学習機関で歴史などの教養系科目が多く開かれているのに対し、韓国のセンターは地域の福祉施設であり平均年齢が高いため、こうした差が出たものと考えられる。

第5節 学習方法と学習の場

図表6-11は学習方法への関心をみたものである。これによると、最も高率であった項目は「講演を聞く」で、これに何らかの関心を示した者は全体の84%にのぼっていた。以下、「何人かの講師による、いろいろな内容の講義を聞く」（77%）、「見学会や体験会などの参加的学習」（71%）、「ひとりで本や雑誌を読む」（66%）、「映画や映像を見て話し合う」（66%）と続く。「少人数で体験発表など」（38%）、「少人数で話し合い学習」（42%）、「共同で作品をつくる」（43%）などはやや低率であった。発表などの形態をする学習方法はやや苦手とされるようだ。男女別では、「インターネット学習」（男性66%、女性49%）、「オンライン学習」（男性59%、女性48%）などは男性の選択率が高く、「共同で作品をつくる」（男性38%、女性48%）などでは女性のほうが高率であった。年

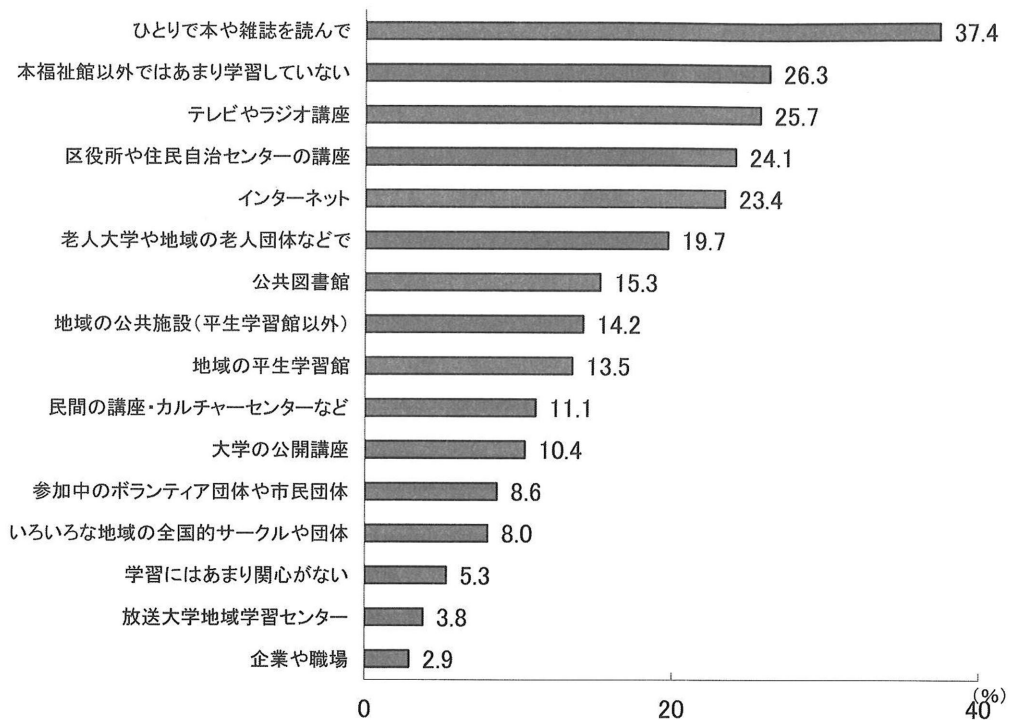


図表 6-11 学習方法への関心 (韓国)

年齢別ではあまり差は出ていなかったが、少人数での話し合い学習などは、75歳以上の者にやや「参加したくない」者が多かった。

日韓比較においては、多くの項目で韓国のほうが大阪データ（2013年調査）より「参加したい」比率が高かった。とくに「インターネット学習」（韓国57%、大阪39%）、「オンライン学習」（韓国53%、大阪34%）などでは韓国のほうがかなり高率であった。ネットを介した学習は韓国のほうが発達しているのかもしれない。大阪のほうがかかなり高率であったのは「ひとりの講師の連続した講義」（韓国61%、大阪75%）のみであったが、これは大阪府高齢者大学校での学習にそうした形態の講座が多いことも関連していよう。

最後に当該福祉センター以外での学習の場をみたのが図表 6-12である。これによると、「ひとりで本や雑誌を読んで」（37%）が最も高率で、以下「この福祉センター以外ではあまり学習していない」（26%）、「テレビやラジオ講座」（26%）、「区役所などでの講座」（24%）、「インターネッ



図表6-12 福祉センター以外での学習の場（韓国、複数回答；N=548）

ト」(23%)と続く。「企業や職場」は定年後の方が多いため、「放送大学地域学習センター」はそうした組織の普及の問題があり、それぞれ比率は低かった。男女別では「図書館」(男性22%、女性10%)、「インターネット」(男性35%、女性14%)などで男性が有意に高率であり、「本福祉館以外では学習していない」(男性21%、女性31%)は女性が有意に高率であった。年齢別では、「地域の老人団体などで」(60代11%、70代前半19%、同後半以降25%)で、年齢が上がるにつれて有意に比率が上昇していた。逆に「区役所などの講座」(60代29%、70代前半28%、同後半以降18%)では、年齢が上がるにつれて有意に比率が減少していた。「本福祉館以外では学習していない」者の比率も70代後半以降で31%と高くなり、本福祉センターは後期高齢期の者にとっての重要な学習の拠点になっているといえる。

この設問の日韓比較では多くの部分で有意差がうかがえたが、それ以前に、そうした場そのものが存在するかどうかの問題となるだろう。韓国の方が有意に高率であったのは、「地域の老人団体など」(韓国20%、大阪8%)、「本高齢者大学以外ではあまり学習していない」(韓国26%、大阪14%)あたりだったが、韓国の回答者が地域に根ざした施設利用者であるため、こうした数値が出たのだと考えられる。「区役所や住民自治センターの講座」(韓国24%)は韓国のみが存在する機関であり、これが活発に利用されているといえる。逆に、「地域の平生学習館(大阪の場合は生涯学習センターや公民館)」(韓国14%、大阪30%)、「カルチャーセンターなど」(韓国11%、大阪29%)、「ボランティア団体・市民団体」(韓国9%、大阪16%)あたりでは大阪のほうが有意に高率であったが、これらも、こうした施設などが居住地域のなかに存在するかどうか大きなポイントとなるだろう。